

かった。

## 8. medulloblastoma の GFAP・Neurofilament による免疫組織学的検索

(脳神経外科)

○遠山 隆・久保 長生・坂入 光彦・  
田鹿 妙子・田鹿 安彦・井上 憲夫・  
氷室 博・喜多村孝一

medulloblastoma 30例について、脳特異蛋白である GFAP ならびに Neurofilament (NF) に対する免疫組織化学的染色を行ない臨床像との対比を行なった。30例中15例に GFAP 陽性細胞を認めた。また17例に NF 陽性細胞を認めた。GFAP・NF ともに陽性細胞を認めた症例は8例あり、これを PNET with bipotential differentiation (PNET-BD) とした。GFAP・NF ともに陽性細胞を認めない症例は5例あり、これを PNET not otherwise specified (PNET-NOS) とした。また GFAP・NF のうち一方が陽性の症例は17例であり、PNET with monopotentiation differentiation (PNET-MD) とした。PNET-NOS の1年および2年生存率は、それぞれ80.0%、53.3%である。PNET-MD では67.8%、49.2%、PNET-BD では25.0%、12.5%である。medulloblastoma において GFAP または NF 陽性細胞が存在し分化を示した症例は、分化を示さない群に比べて、その予後が不良である。

## 9. 側頭葉てんかんにみられた small cryptic tumor (microtumor) の1例

(第二病院脳神経外科)

○井出 光信・山本 昌昭・神保 実  
(脳神経外科) 久保 長生・喜多村孝一

症例は15歳、女性、10歳時より automatism が出現。3年後には全身けいれんを伴うようになった。他院に通院し、十分量の抗てんかん薬が投与され血中濃度も有効濃度に達していたが automatism は control されなかった。昭和60年7月(15歳時)精査目的に当科入院した。CT、脳血管撮影等の検査で異常を認めなかったが、脳波検査で右側頭葉の棘波焦点が証明された。同年8月22日右側頭葉切除術施行。術後経過は順調で発作は完全に消失。脳波でも発作波を認めなくなった。摘出標本は肉眼的には異常を認めなかったが、組織学的検索では側頭葉内側部の灰白質に oligodendroglia 様細胞の nest がみられ、また周囲の白質部分の Virchow-Robin 腔にも、oligodendroglia 様細胞の増生を認めた。これらの所見は摘出標本の5mm以下の範囲に認めた。このような病理所見は ethylnitrosour-

ea 誘発 rat 脳腫瘍にみられる microtumor と酷似しており、本症例はヒトにおける microtumor の存在を示唆するものではないかと考え報告した。

## 10. 迅速 Golgi 法によるヒト大脳半球第4野錐体細胞の加齢変化

(神経内科) ○渡辺 弘美・丸山 勝一

迅速 Golgi 法を用い、20歳から96歳迄の30例の剖検脳にて左大脳半球第4野、第III層錐体細胞の apical dendrite 上のスパイン (spine) を年代別に観察し、その加齢変化をみた。スパイン数は各年代とも神経細胞から200~350 $\mu$ の部位でピークを示した。apical dendrite の長さ1 $\mu$  当りのスパイン数は65歳以上の群で有意の減少を示した。ピーク値を含んだ前後150 $\mu$  にわたる範囲でみると50~69歳の年代ですでに1 $\mu$  当りのスパイン数には減少傾向が認められ、その傾向は加齢と共に一層明らかとなった。加齢によるスパイン喪失が最も著明なのは、直径4 $\mu$  以下の細い dendrite であった。

spine は axon terminal と dendrite を結ぶ axo-spino-dendritic synapse の post synaptic site であり、spine の減少は synaptic input の減少を推測せしめ、それが加齢に伴う運動能力の低下につながる可能性がある。spine の機能的意義についても若干の文献的考察を行なった。

## 11. 間質性肺病変を合併した多発性筋炎の2例

(リウマチ・痛風センター)

○谷口 教夫・渡辺 富博・西岡久寿樹  
(腎センター内科)

川嶋 朗・長田真理子・西川 恵

多発性筋炎(以下 PM と略す)に間質性肺疾患を伴うことはよく知られている。その頻度は以前は比較的少ないとされていたが、近年の報告によると必ずしもそうではなく、膠原病に伴う間質性肺疾患の中では、PSS について多いとも言われている。また抗原抗体反応の場として肺は腎に劣らず高頻度に冒されることが明らかとなりその意味でも注目されている。今回我々は間質性肺病変を合併した PM の2例を報告する。症例1では PM の所見とともに全肺野に間質性的変化が認められた。筋炎の症状、所見はステロイド剤によく反応したが、呼吸器症状は自覚的には改善が見られたものの、胸部 X 線写真、肺機能検査上は改善を認めていない。症例2では激しい筋炎の所見とともに間質性肺病変を合併していた。このような PM に合併する間質性肺病変はステロイド剤に対し抵抗性の場合が多